論壇

「北の海と空から」北極のお話

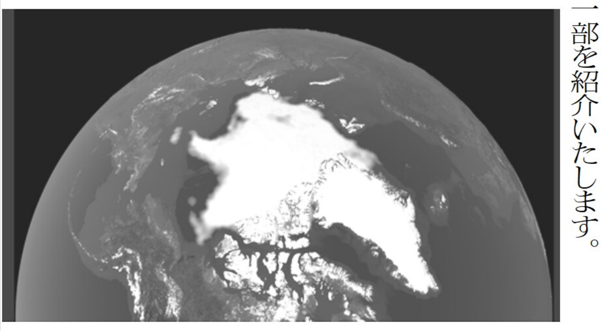
海上自衛隊幹部学校　戦略担当教官　２等海佐　石原　敬浩

はじめに

こんにちは、初めまして。海上自衛隊幹部学校教官の石原と申します。大阪出身、防衛大学校26期。定年を迎えましたが、再任用で戦略担当教官とし、還暦を超えた現在でも制服自衛官として仕事をさせていただいています。階級は２等海佐、昇任は平成９年７月ですから、継続同一階級の自衛隊記録、ギネス級（？）かもしれません。そして、２０１６年からは慶応大学で非常勤講師も兼ねています。

そこでは「人類と戦争の歴史」や「大戦争と戦後の国際制度・秩序の変遷」といった内容の講義をやってます。

そういった事柄に関して、論文や本も書いていまして今年ＰＨＰ新書から「北極海」という本を出版しました。今日はその一部を紹介いたします。



温暖化とウクライナ戦争で注目される北極海

開戦以来２年近くが経過して出口の見えないウクライナ戦争と気候変動・温暖化に伴う地球の危機、この全く異なる要因により地政学的な緊張が高まっている地域があります。それが北極海です。

２０２２年ＮＡＴＯのストルテンベルグ事務総長は「北極におけるロシアの軍事力強化はＮＡＴＯにとっての戦略的な挑戦だ」と述べ、強い警戒感を露わにしました。クリミア半島併合以降警戒感を高めていたのですが、昨年２月のウクライナ侵略は予想できない事態でした。武力の行使はあっても、こんなに長期化する、激烈な戦闘の継続、さらには核兵器の恫喝もあり、欧州正面で緊張が一気に高くなりました。

長年中立政策をとっていたスウェーデンやフィンランドがＮＡＴＯ加盟に動いたことは世界中のニュースになりました。ウクライナのＮＡＴＯ加盟を恐れ、ＮＡＴＯの東方拡大が戦争の原因だと主張するロシアにとっては、全くの天ツバ行為、逆効果です。

それとは別に、地球温暖化で南極や北極の氷が融ける、北極海航路が現実のものになる、資源採掘が可能になる、権益確保に備えて軍事基地を再開発しよう、演習をやってやろう、そういった活動が増加しているのが近年の動きです。

北極海は冷戦期、まさしく米ソ対峙の最前線でした。メルカトル図法（よくある世界地図）ではなく、地球儀をイメージして下さい。上空では核ミサイル・爆弾を搭載した米ソの爆撃機が空中で待機する、水中では弾道ミサイル搭載原子力潜水艦（ＳＳＢＮ）が哨戒する緊張の最前線でした。

ＮＯＲＡＤと北米沿岸のレーダー網

核兵器を搭載した爆撃機や弾道ミサイルは、北極の上空を経由して飛行するのが最短ルートです。そのため、米国を中心とするＮＡＴＯ側は、グリーンランドに大規模な米空軍の基地を設置しソ連爆撃機を迎撃する準備、あるいは逆にソ連攻撃の備えを行っていました。

また、北極上空を監視するため北米航空宇宙防衛司令部（ＮＯＲＡＤ：Ｎｏｒｔｈ Ａｍｅｒｉｃａｎ Ａｅｒｏｓｐａｃｅ Ｄｅｆｅｎｓｅ Ｃｏｍｍａｎｄ）が米国とカナダ共同で設置され、警戒システムであるレーダーサイト（パインツリー・レーダー網）がカナダ・アラスカの北極海沿岸に一定距離ごとに設置する態勢がとられました。

探検家の植村直己は、北極圏をグリーンランドからカナダ経由アラスカまで１万２千㎞、１年半かけて犬ぞりで踏破しましたが、その最中にこのレーダー基地を利用しています。

１９７５年の大みそか、カナダの北極海沿岸のレーダー基地に立ち寄りました。冬の北極圏は太陽が一日中顔を出さない極夜。そんな中、人間の顔を見ることなく、ひたすら犬ぞりで極地をかける探検家。一方、人里離れたレーダーサイトで部外者が訪問するはずもない北極海沿岸で、大みそかに当直勤務に就く軍人、熱い交流となりました。

基地の軍人がとんでもない好意を示し、通信衛星経由、軍用電話を利用し、米軍横田基地経由で東京の自宅まで電話したとあります（植村直己「北極圏１万2千キロ」）。

その当時、既に衛星中継を利用した軍用電話システムが、人里離れた北極海のカナダ沿岸で利用されていたことに驚きを感じるとともに、年末でも即応態勢を構築、維持していたことがよく理解できるエピソードです。

サンタクロースの追跡プログラム

核戦争に備える施設・部隊に関連して、ほっこりエピソードをもう一つ。

12月になるとクリスマスソングが街中に流れる、サンタクロースに扮した店員さんやおじさんがそこら中にいる、それが昭和の風景でした。

北欧に住んでいて、トナカイのそりに乗り、子供たちへのプレゼントを満載して、イブの夜に世界中を飛び回る。地球を何度も南北に動きながら1周する、それも一晩で。ルドルフの引くソリ、大変なスピードで空中を駆け回ります。

核戦争の最前線、ＮＯＲＡＤではその姿、現在位置を世界に教えてくれるプログラムがあります。その名も「ＮＯＲＡＤトラックサンタ」。

このおしゃれなプログラム、１９５５年に子供の間違い電話に当時のＮＯＲＡＤ司令官が出て「サンタさんはどこにいるの？」という子供の質問に「世界最高のレーダーがあるので調べてみましょう」と答え、サンタクロースの現在位置情報を教えたことがきっかけで広まった行事といわれています。

諸説あるようですが、ここは心温まるエピソードとしましょう。それ以来ＮＯＲＡＤがサンタクロースの現在位置を電話で聞いてくる子供の問い合わせに丁寧に答える、ニュース番組に情報を提供するなどが毎年恒例となっていきました。現在までこのイベントは継続し、世界中にそれが広がったという、温かいエピソードです。ほんと冗談が好きなアメリカ人らしい対応ですが、ぜひ小さなお子さんがいるご家庭での「サンタさんはいつ来るの、どこにいるの」という無邪気な質問には、インターネット上、ＮＯＲＡＤのサイトをお勧めします。

98年から稼働している特設サイト“ＮＯＲＡＤ Ｔｒａｃｋｓ Ｓａｎｔａ”。このサイトはこれまでにさまざまに進化してきました。12月になるとサイトは開設される模様ですが、イブまではトナカイ（ルドルフ）も暇そうに、あくびをしたりして待機する映像が表示されていました。

クリスマス・イブの夕方から、ＮＯＲＡＤのレーダー網や静止衛星情報、偵察で飛行する航空機の情報などを合体させ、サンタクロースの現在位置を追跡します。その情報はリアルタイムでＧｏｏｇｌｅ Ｍａｐｓ上に表示されます。

ほんとリアルな画像です。最近では日本語ページもあります。その瞬間までに何個配達したとかのデータも見えます、サンタさんが訪問した街の写真も出てきます。さらにＧｏｏｇｌｅ Ｅａｒｔｈではサンタさんの飛行経路が３Ｄで追跡できるようにもなっていました。

子供からの問い合わせ電話には、ボランティアの方々が対応しているそうで、元ファーストレディのミシェル・オバマ夫人は２００９年から16年までプログラムに参加し、子供たちからの電話に答えていたらしいです。ちょっとほっこりできるお話でしょう。

嫌なニュースの多かった23年でしたが、来年こそは良い年になりますよう、皆さまにも良い春が訪れますように。

そして、メリークリスマス!!

NORAD
TRACKS SANTA
I-877-HI-NORAD
N
WWW.NORADSANTA.ORG

ジョン万次郎の話（その2）

前ハーバード大学上席研究員　磯部　晃一（元陸将）

第45回

１８４３年、ジョン万次郎を乗せた捕鯨船、ジョン・ハウランド号が母港のフェアヘブンに帰港するところまで先月号で紹介しました。その後、万次郎が送った数奇な人生をたどってみます。

ホイットフィールド船長の家は現存しており「ホイットフィールド・万次郎友情記念館」として夏季シーズンに公開されています（**写真**）。

この家は、現在のフェアヘブンのチェリー通りという閑静な住宅地にあります。万次郎は最初の数日を船長と一緒に過ごしますが、船長は当時、独り身だったので、彼の親類の家に預けられました。その後、ホイットフィールド船長が再婚して新しい家を建てたので、万次郎もそこから学校や教会に通い始めます。

多くの級友は万次郎を温かく迎えますが、保護者の中には、異国の地からやって来た万次郎を歓迎しない人もいました。ホイットフィールド船長は、万次郎を近くの教会に連れて行きます。しかし、その教会では、万次郎を船長家族と同じ席に座ることを許さず、万次郎は黒人の席に座るように言われました。船長は、万次郎を家族と一緒に座ることのできるユニタリアン教会に通わせることにしました。

万次郎がフェアヘブンで過ごした3年間の月日は彼にとってかけがえのない毎日でした。彼の境遇を想像してみるとわかると思います。物心つき始めた歳に漁に出て14歳で遭難、16歳から19歳までの多感な青春時代を欧米流の教育を受けて育ったのです。船長が見込んだとおり、彼は利発で、物事の吸収が早かったのです。英語の読み書きはもとより、数学、航海術を学校で学びました。万次郎は後に帰国して、ナサニエル・ボウディッチ著の海洋学や気象学など航海に必要な知識を総合的に紹介した「実用アメリカ航海学」を日本語に翻訳しています。

46年、万次郎は再び、航海に出ます。この航海で、万次郎の乗った捕鯨船は日本の近海までやってきますが、鎖国の日本に寄港することはかなわず、望郷の念が募る中、やむなく日本から遠ざかって捕鯨を続けました。おそらく、この航海で万次郎は、日本に帰る気持ちが強くなったのでしょう。

50年、23歳になった万次郎は、日本に帰る決意をします。彼は、ゴールドラッシュに沸くカリフォルニアにわたり、金鉱で帰国のための資金を稼ぎました。そこから、万次郎は、ホノルルに向かい、遭難した当時の漁師仲間と再会を果たします。50年12月、万次郎は合流した仲間とともに、上海行きの商船に乗り込み、日本を目指しました。そして、翌51年2月2日、沖縄本島沖で、商船に持ち込んでいた「アドベンチャー号」という小舟に乗り換え、万次郎一行は、現在の糸満市の浜辺に上陸しました。ペリー提督が浦賀に現れる2年ほど前のことです。

一行は、厳しい鎖国政策を敷いていた江戸幕府の指示により、薩摩藩、長崎奉行所、土佐藩で幾度にもわたる取り調べを受けます。一行は万感の思いを抱いて郷里に戻りました。その時すでに糸満上陸から1年半、遭難からは実に11年の歳月がたっていました。おそらく、浦島太郎のごとき胸中であったことでしょう。

風雲急を告げる幕末において、歴史は万次郎を放っておくはずはありませんでした。53年のペリー艦隊の浦賀訪問、日米和親条約締結、明治維新による西洋学術の導入などにおいて、万次郎は、フェアヘブンで培った英語力を生かして活躍しました。70年、普仏戦争視察の一員に選ばれた万次郎は、欧州からの帰途、アメリカを訪問し、20年ぶりに、命の恩人、ホイットフィールド船長との再会を果たしました。万次郎はその後、教育者として世に貢献し、幕末から明治維新を経て近代日本の世情において、米国と日本で活躍した唯一の日本人としての生涯を89年に閉じました（続く）。

米中首脳会談の結果

話は変わりますが、11月15日にサンフランシスコにおいて、米中首脳会談が開催されました。バイデン大統領と習近平主席によるトップ会談は、1年ぶりで食事を含めて4時間にわたり議論したと発表されました。

しかし、実質的には、お互いに主張すべきを主張し合い、核心的でない事項については合意したというのが実態です。

合意事項は、国防当局や軍同士の対話再開、米国で乱用が問題視されている医療用麻薬対策での協力、人工知能（ＡＩ）や気候変動対策に関する政府間対話の立ち上げといった内容でした。軍の対話再開は、昨年8月のペロシ下院議長訪台に反発して中国が一方的に中断したものを元に戻すだけの話です。医療用麻薬や気候変動に関しても対話を始めることは双方にとって一応対話するという姿勢を内外にアピールするものです。

核心部分であった台湾の問題は、習氏が「必ず統一する」と改めて表明したのに対してバイデン氏は台湾海峡の平和と安定の重要性を提起したとされ、全くかみ合っていません。

さらに、半導体などの対中輸出規制の撤廃を習氏が要求したのに対して、バイデン氏は拒否しています。

互いに、国内の世論や経済事情に配慮して、安全保障に関する核心的な問題については、合意を図ろうという意志はありませんでした。

米国では、来年11月の大統領選挙を控え、議会においても対中強硬論が高まる可能性があります。中国は習氏による国内の統制が一層厳しくなり、経済成長や不動産市場にも悪影響が出始めています。

今後、中国が経済不振などにより国内が不安定化すれば、その不満のはけ口を国外に向ける可能性が高まります。米中首脳会談があったからといって、安心できるような状況ではないということです。

※著者ホームページ
ｉｓｏｂｅｋｏｉｃｈｉ．ｃｏｍ
※著者Ｘ（旧ツイッター）
＠Ｉｓｏｂｅ＿ｋｏｉｃｈｉ

国内外情勢（２０２３年11月）

◇硫黄島沖に島出現（11月１日）
小笠原諸島・硫黄島の南の沖合約１㎞で噴火が起き、島が出現しているのを海上自衛隊硫黄島航空基地隊が確認しました。

◇米海軍制服組トップに女性、議会上院が承認（11月2日）
米議会上院は２日、米海軍制服組のトップである作戦部長にリサ・フランチェッティ作戦副部長が昇任する人事を承認しました。海軍作戦部長に女性が就くのは初めて。

◇フィリピンに監視レーダー供与へ（11月5日）
政府は「同志国」の軍に防衛装備品などを無償で提供するために今年度に創設した「政府安全保障能力強化支援（ＯＳＡ）」をフィリピンに初めて適用し、沿岸監視レーダーを供与します。

◇上川外相、人道目的の戦闘休止を主張（11月7日）
Ｇ７外相会合が７日、東京都内で２日間の日程で始まり、ガザ情勢をめぐって集中的に協議し、議長を務める上川陽子外相は、人道目的の戦闘休止の必要性を訴えました。

◇「準同盟」日英閣僚会合、共同訓練拡大など確認（11月7日）
日英の外務・防衛担当閣僚会合が外務省で開かれ「準同盟」関係にある両国が、共同訓練の拡大など安全保障協力を進めていくことを確認しました。

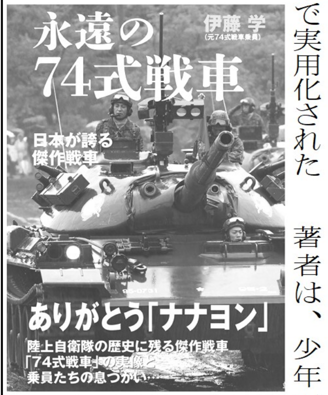
◇防衛省、国産ミサイル早期取得に1523億円（11月10日）
防衛省は、閣議決定予定の2023年度補正予算案に国産ミサイルの取得経費を含め、総額8130億円を計上しました。

◇米中首脳会談、軍事対話の再開で一致（11月15日）
バイデン米大統領と中国の習近平国家主席は、米サンフランシスコ近郊で会談し、軍幹部同士の協議など、米中間の対話を再開することで合意しました。

◇北朝鮮が軍事衛星を積んだロケット発射か（11月21日）
韓国軍合同参謀本部は21日夜、北朝鮮から「軍事偵察衛星」が発射されたと発表しました。

◇オスプレイ墜落、国内初の死亡事故（11月29日）
米軍のオスプレイが29日午後、鹿児島県の屋久島沖で墜落し、乗員の死亡が確認されました。

書籍紹介



定価：1800円+税
発行：並木書房

永遠の74式戦車

日本が誇る傑作戦車

伊藤　学【著】

１９７４年の制式化から半世紀、日本の国土を守り続けた「74式戦車」は、その役目を終えて次々に退役し、いまやいくつかの部隊に残っているのみとなりました。

61式戦車に比し操縦しやすく、１０５㎜戦車砲は高度な射撃統制装置により高い命中精度を誇っていました。74式戦車で実用化された「姿勢制御装置」は、後継の90式戦車や10式戦車に受け継がれ、日本の国産戦車に不可欠の装置となっています。

著者は、少年工科学校（現高等工科学校）を卒業後、戦車に憧れ、戦車乗り一筋の自衛官人生を送っており、戦車に対する深い愛情に溢れた内容となっています。

74式戦車の開発、メカニズム、運用面まで、[illegible]

私は、現役時代、61式戦車、74式戦車、90式戦車、10式戦車、16式機動戦闘車の全てに乗り、これらを装備する部隊を運用した経験がありますが、読み進めるにつれ、筆者が戦車に詳しく、戦車を深く愛していることが分かりました。

特に、戦車乗りの必須事項といえる、乗りこなし方が詳細に記述されています。

例えば、戦車乗員は通信のためのヘッドセットを付けていますが、戦車が砲塔を回転する際にそのコードが車体に巻き込まれないよう、自分の胴体にコードを巻き付けてコードをむやみにたらさないように気を付けるように躾けられています。

「そうそう、こんなことしたな！　これをやらなかったら、むちゃくちゃ叱られたな！」と懐かしく思い出しました。

この本は、戦車を愛する人のみならず、多くの人に読んでもらいたいと思いました。

あなたも、戦車乗りワールドを覗いてみませんか？

（元陸自戦車乗り　自衛隊家族会業務執行理事）

砕氷艦「しらせ」が南極に向け出航

「しらせ」の出航（海幕TW）

「しらせ」を見送るご家族（海幕TW）

第65次南極観測隊（橋田元隊長）を支援する砕氷艦「しらせ」（艦長・斎藤一城１等海佐、乗組員１８０人、１２６５０㌧）が11月10日、神奈川県横須賀市の海上自衛隊横須賀基地を出港しました。

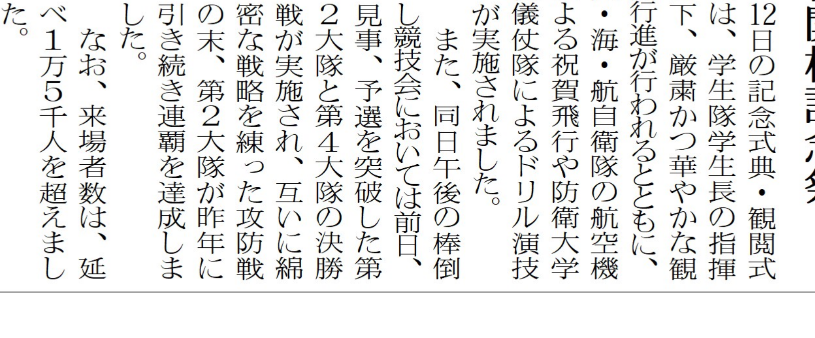
「しらせ」は横須賀を出港したのち、オーストラリアを経由して、12月下旬に南極・昭和基地に到着し、基地設営支援・観測支援などを行います。

出港前の記念式典には約６００人が参加。酒井良海上幕僚長は、乗り組む海自隊員に向け、「（南極の）美しくも過酷な気象環境にさまざまな困難が立ちはだかると思われるが、観測隊と一致団結して任務を完遂することを期待する」とあいさつしました。

その後、斎藤一城艦長が「南極に向け出港します」と宣言すると約１８０人が乗艦、家族や関係者が手や旗を振る中で港を出港しました。

総行動日数は、１５１日で、来年４月８日に日本に帰国する予定です。

4年ぶりの一般公開　防衛大学校開校記念祭



第２大隊の攻撃（防衛大学校HP）

11月11日と12日の両日、防衛大学校（横須賀市）で71回目となる開校記念祭が4年ぶりに入場の制限なく施設を一般開放して実施され、観閲行進、訓練展示、棒倒しなどが行われました。

12日の記念式典・観閲式では、学生隊学生長の指揮で、厳かつ華やかな観閲行進が行われ、陸・海・航自衛隊の航空機による祝賀飛行や防衛大学校によるドリル演技が実施されました。

また、同日午後の棒倒し競技は前日、見事、予選を突破した第２大隊と第４大隊の決勝戦で、互いに緻密な攻防を練った攻防戦の末、第２大隊が昨年に引き続き連覇を達成しました。

なお、来場者数は、延べ１万５千人を超えました。